

大阪・野田地区における住民と来訪者にとっての魅力資源とその共有化に関する研究 —協働によるまちづくりを展望して—

(社) システム科学研究所 西江 幸久
 東京大学大学院工学系研究科 中村 仁
 大阪市立大学大学院工学研究科 赤崎 弘平

1. はじめに

大都市に広範に分布する密集市街地では、防災性能の向上が都市政策上の課題であるが、市街地の老朽化や住民⁽¹⁾の高齢化に伴いまちの活力が低下している地域では、まちづくり活動を持続的に進めることそのものが困難となっている。

本研究の対象地区である野田地区(大阪市福島区)⁽¹⁾は、戦前長屋が多く集積する密集市街地であり、大阪市の防災性向上重点地区や国の都市再生プロジェクトに位置づけられている。野田地区では、阪神・淡路大震災を契機に地区内の住環境への問題意識が住民間で高まり、1998年、まちづくり組織「野田のまちづくりを考える会」(以下、考える会)が地元町会を母体に設立され、行政や専門家の支援のもと、住民によるまちづくり活動が進められた⁽²⁾。しかし支援終了後は、住民の高齢化など地区内の様々な事情により活動が停滞気味であり、新たな活動の担い手確保が課題のひとつである。

ところで今日のまちづくりは、住民や行政などの地区に直接根ざした主体のみならず、企業やNPO、一般市民やクリエイターなど地区外からの来訪者の視点も交え、多様な主体が協働して進めていくことが必要視されている。その中で都心近傍に立地する福島区(図1)は、地区外からの来訪者が比較的多いことから、住民と来訪者の協働によるまちづくりを進めていける可能性が高いと推察される。

本研究では、旧来より地区内に住民票を持ち、町会活動に積極的に参加する概ね50~80代の比較的高齢層の地区居住者を「住民」、地区外に住民票を持ち、仕事や遊び目的で地区内に来訪する概ね20~40代の比較的若年層を「来訪者」と定義した。その上で、双方の協働によるまちづくりを検討する手がかりとして、地区内の潜在的⁽³⁾な「魅力資源」⁽⁴⁾に着目し、双方にとっての魅力資源の把握と共有化を図った。



図1 大阪市福島区野田地区の位置

2. 目的および方法

本研究の目的は、野田地区の潜在的な魅力資源に関して、①住民と来訪者によって認識される魅力資源の特徴およびその差異、②住民と来訪者によって共有化されやすい魅力資源の特徴、を明らかにすることである。

研究の方法として、住民、来訪者、双方をそれぞれ対象としたワークショップ(以下、WS)を実施し、魅力資源の把握と

共有化を行った。研究の流れは図2の通りである。

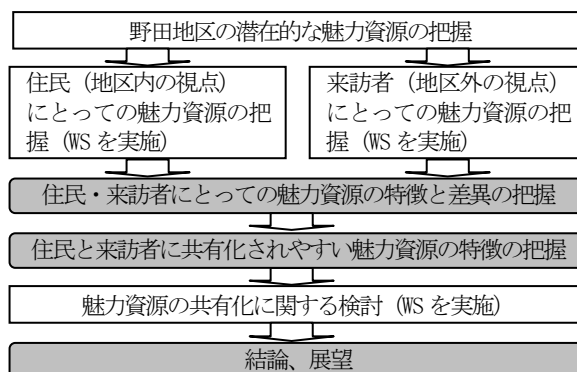


図2 研究の流れ

3. 野田地区の潜在的な魅力資源の把握

ここでは地区の特性を有し、人為的・自然的に移動することが容易ではない有形・無形の潜在的な魅力資源を対象とした。有形の資源は筆者の外観目視⁽⁵⁾により、無形の資源は考える会へのヒアリングにより把握し、住民が作成した「野田地区環境マップ」⁽²⁾により補完した。その結果「建物」「工作物」「樹木・花」⁽⁶⁾「路地」「広場」の5つの有形な資源系と無形の資源系から構成される、計256件の「野田地区の潜在的な魅力資源」が地区内から抽出された(表1)。これらの資源は地区内にまんべんなく分布している(図3~5)。

表1 住民および来訪者にとっての魅力資源

分類	名称	野田地区の潜在的な魅力資源	住民にとっての魅力資源	来訪者にとっての魅力資源	両者にとっての魅力資源	
有形資源(単体)	建物	長屋住宅	45	16	10	6
		戸建住宅	20	9	0	0
		屋敷	10	4	2	2
		蔵	12	12	1	1
		長屋店舗	15	2	6	1
		戸建店舗	11	0	1	0
		銭湯	3	2	1	0
	公共施設 ^(※1)	7	5	1	1	
	計	123	50	22	11	
	建物以外	工井戸	6	5	4	4
		作地蔵尊・鳥居	18	17	6	5
石碑・記念碑		8	7	2	2	
樹木・花		47	13	12	5	
計	79	42	24	16		
有形資源(空間)	路地	鉢植の緑がある路地	14	4	6	2
		井戸のある路地	5	4	3	3
		地蔵尊・鳥居のある路地	5	5	1	1
		石置のある路地	10	6	6	4
	その他の特徴的な路地 ^(※2)	5	1	2	0	
計	39	20	18	10		
広場	公有地(地区公園等)	4	4	0	0	
	私有地	2	2	0	0	
計	6	6	0	0		
資源無形	祭・行事 ^(※3)	6	6	4	4	
	云われ・歴史的事象 ^(※4)	3	3	0	0	
	計	9	9	4	4	
合計		256	127	68	41	

(※1) 大阪市の施設(大阪市中央卸売市場等)、病院、スーパー、学校、公民館を指す
 (※2) その他の特徴的な工作物: 壁画、アニメキャラクターの置物、大八車の車輪
 (※3) トンネル状の路地、階段のある路地を指す
 (※4) 地蔵盆、数珠練り、だんじりの地車と祭、盆踊り、餅付きを指す
 (※5) 云われのある張り紙、安治川の渡し舟、大阪の勝手口(中央市場)に関する事柄を指す



図3 潜在的な魅力資源の分布 (建物)

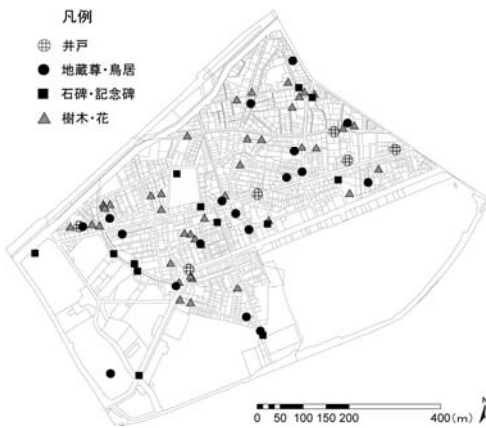


図4 潜在的な魅力資源の分布 (工作物/樹木・花)



図5 潜在的な魅力資源の分布 (路地/広場)

4. 住民・来訪者にとっての魅力資源の把握

「野田地区の潜在的な魅力資源」の中から、住民および来訪者にとっての魅力資源を把握するため、住民を対象としたWS(7)を2回、来訪者を対象としたWS(8)を1回実施した。その結果「住民にとっての魅力資源」は計127件、「来訪者にとっての魅力資源」は計68件であり、そのうち双方が共に認識した魅力資源は計41件であった(表1)。

図6は「野田地区の潜在的な魅力資源」「住民にとっての魅力資源」「来訪者にとっての魅力資源」それぞれの資源系別の比率を示したものである。これより「住民にとっての魅力資源」

は「建物」「工作物」の比率が特に高く、「来訪者にとっての魅力資源」は「建物」「路地」の比率が特に高く、双方の魅力資源に対する認識には共通性と差異がみられた。

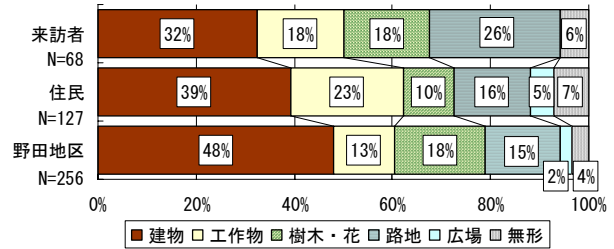


図6 住民および来訪者にとっての魅力資源の構成比率

5. 住民・来訪者にとっての魅力資源の特徴と差異

続いて、住民および来訪者にとっての魅力資源を表2に示す3つの資源群に分類し、それぞれの特徴を把握した(図7)。

表2 魅力資源の分類

野田地区における魅力資源	来訪者	
	選択	未選択
住民	資源群①	資源群②
	未選択	資源群③

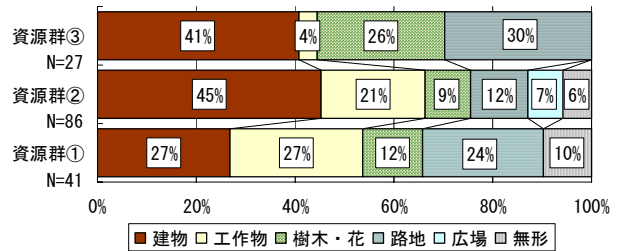


図7 資源群ごとの魅力資源の構成

資源群①は住民・来訪者双方に認識された魅力資源であり、まちづくりへの有効活用が期待される。傾向として「建物」「工作物」(27%)と「路地」(24%)の比率が高く、それぞれ「長屋住宅」「地藏尊・鳥居」「石畳のある路地」等が目立つ。そのほか地区の特性を特に示す資源として「大阪市中央卸売市場」(公共施設)や「野田藤」があった(図8・写真1~2)。

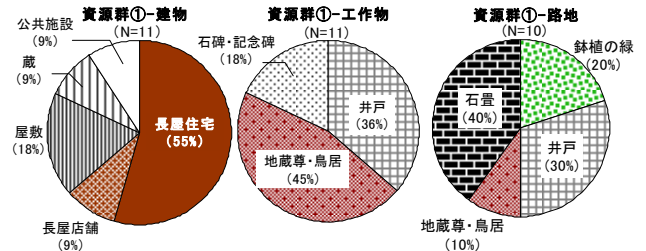


図8 住民・来訪者双方に認識された魅力資源の構成 (系列)



写真1 資源群①の例 (㊦長屋住宅 ㊦大阪市中央卸売市場)



写真2 資源群①の例 (左)地蔵尊 (右)石畳のある路地

資源群②は住民のみに認識された魅力資源であり、来訪者との共有化を図ることでまちづくりへの有効活用が望まれる。傾向として「建物」(45%)や「工作物」(21%)の比率が高く、それぞれ「蔵」「地蔵尊・鳥居」等が目立つ(図9・写真3)。

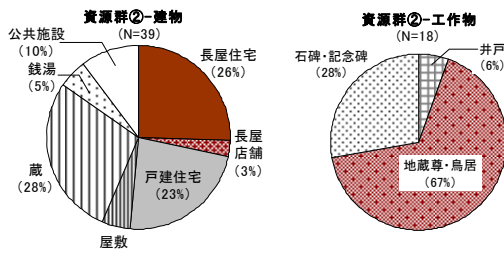


図9 住民のみに認識された魅力資源の比率 (系別)



写真3 資源群②の例 (左)蔵 (右)地蔵尊・鳥居

資源群③は来訪者のみに認識された魅力資源であり、住民との共有化を図ることでまちづくりへの有効活用が望まれる。傾向として「建物」(41%)や「路地」(30%)のほか「樹木・花」(26%)の比率が高く、それぞれ「長屋店舗」「鉢植の緑がある路地」等が目立つ(図10・写真4)。

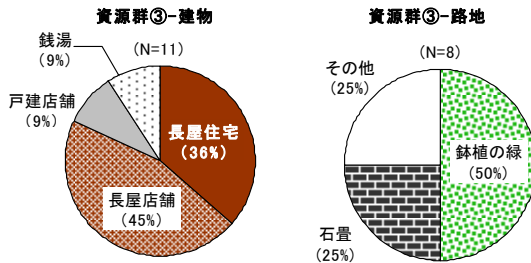


図10 来訪者のみに認識された魅力資源の比率 (系別)



写真4 資源群③の例 (左)長屋店舗 (右)鉢植の緑がある路地

6. 住民と来訪者に共有化されやすい魅力資源の特徴

ここでは来訪者の働きかけによる住民との協働によるまちづくりを検討するため、「来訪者のみが認識した魅力資源」(資源群③) 27 件の写真と来訪者のコメントが載ったシートを用いて、双方を対象としたWS⁹⁾を通じて住民との共有化を図った。WSでは住民と来訪者が均等に分かれるように2班に分け、参加者全員に「魅力的」と思うシートを複数選定してもらった(1次選定)。さらに班ごとに自由な意見交換を行ったのち、特に魅力的だと思うシートを1人あたり3枚選定してもらい(2次選定)、最後に班ごとに会場発表を行った。

WSの結果、新たに14件(52%)の魅力資源が住民に認識され(表3・図11の資源群③-A)、とりわけ長屋や緑に関するものが目立つ(写真4・5)。

一方、住民が全く認識しなかった魅力資源は8件(30%)であり、緑や路地に関するものが多い。

表3 来訪者の魅力資源に関する住民との共有化の結果

資源群	1次選定	2次選定	計	建物	工作物	樹木・花	路地
③-A	○	○	14	7	1	4	2
③-B	○	×	5	3	0	0	2
③-C	×	○	0	0	0	0	0
③-D	×	×	8	1	0	3	4

○:選定 ×:非選定 単位:件

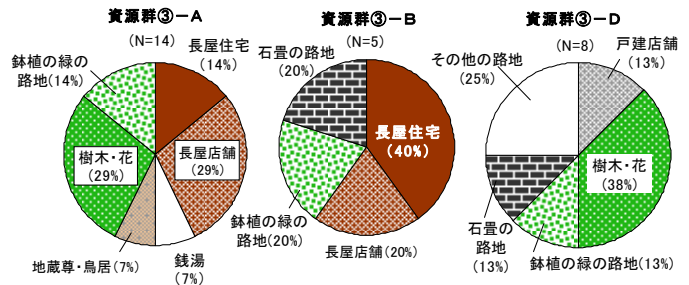


図11 来訪者のみの魅力資源の住民との共有化の結果



写真5 共有化された魅力資源の例 (左)長屋店舗 (右)銭湯

7. 結論

野田地区の魅力資源に関し、下記の事項が明らかになった。

①住民と来訪者によって認識される魅力資源の特徴・差異

「建物」は双方が魅力資源と認識しやすい。特に地区内に多く集積する「長屋住宅」や地区の特性を示す施設(中央市場)で顕著である。ただし「蔵」は住民に、「長屋店舗」は来訪者に、それぞれ認識の傾向が偏り差異がみられた。

「工作物」は比較的住民が魅力資源と認識しやすい。特に「地蔵尊・鳥居」で顕著であり、地区の祭事の地蔵盆に関連が深いと推察される。ただし双方に共有された地蔵尊も存在した。

「樹木・花」と「路地」は比較的来訪者が魅力資源と認識し

やすい。路地については「鉢植の緑がある路地」の認識が特に高いことから、総じて「緑」に関する魅力資源は来訪者が認識しやすい。ただし地区の特性を示す樹木（野田藤）は双方に、季節を感じる樹木（桜）は住民に認識された。また「石置のある路地」は双方に認識されやすい。

②住民と来訪者によって共有化されやすい魅力資源の特徴

住民は、来訪者の魅力資源のうち「長屋」や「緑（樹木、鉢植）」に関する資源を、新たな魅力と認識する傾向がある。

8. 展望

共有化のWS後に実施した住民アンケートでは、約7割の住民が「新たな魅力資源の発見があった」とし「まちづくりへの意気込みが高まった」と回答した。具体的意見（表4）として、来訪者のまちづくりへの参加を歓迎する意見と共に、継続的な意思疎通を望む意見がみられた。また今後のまちづくりの方向性としては、若者が住みたいまちを目指すとともに、目標の設定を明確にする必要があるとの意見がみられた。さらに今後のまちづくりの課題として、地区内の比較的若年の住民の参加を望む声や、若年の担い手にまちづくりのノウハウを教えたい趣旨の意見がみられた。これらの意見の多くは地区内外に居住し、まちづくりの新たな担い手になりうる若年層に対する意見と捉えることが出来、来訪者に対する一定の評価が伺える。

その後の野田地区では、共有化のWSに参加した来訪者の一部と考える会の一部により、双方の協働によるまちづくりの検討が、筆者のひとりである西江のコーディネートで進められた。その結果、考える会3名と来訪者から構成される新たなまちづくり組織が2006年7月に結成され、野田地区を中心にしたまちづくり活動が今日まで継続されている⁽¹⁰⁾。

今後は、新団体による具体のまちづくり活動を通じて、住民との意思疎通を図っていくことが期待されると共に、新たなまちづくりの担い手を、来訪者のみならず、地区内の比較的若年の住民の中から発掘していくことが必要である。

表4 共有化WS後の住民アンケートの結果（自由記述）

1)新たに認識した魅力資源に対する意見
「外から見るとそう見えるのか」と感じた。
「銭湯が魅力」という語や「路地の風景がなつかしさを癒しを呼ぶ」という語に、改めて魅力を気付かされた。
植栽の大きさを一層感じました。
2)その他の魅力資源に対する意見
野田は中央卸売市場のまちだが話題に出なかった。地区外の人は市場をどう思っているのか。
野田ええとこ百選として新しいマンション風景も加えてはいいかですか。
3)来訪者のまちづくりへの参加に対する意見
若い人たちの意見が聞けてよかった。
とても良いことで推進して頂きたい。
まだ意思疎通が必要だと思う。
初めての機会であり、今後もっと回数を重ねて行くといい意見が出るのではないかな。
4)まちづくりの意気込みに関する意見
町づくりの意義を再確認した。
住民の立場として、ボランティア的な活動が出来れば良い。
5)まちづくりの方向性に関する意見
対象が具体的にイメージしにくいですが、町づくりをどこに重きを置くか、もう少し議論した方がいい気がします。
若者が住みたい町として発展して欲しい。
6)まちづくりの課題に関する意見
野田に住んでいる若い住民たちが参加出来るようなことも考えないといけない。
新しいマンションが建ったり計画があったりして、これから大きく変化していく感じます。この時期に町づくりのメッセージが多く伝えられれば良いと思います。

-補注-

- (1) 野田地区は、明治期後半から大正期にかけて、地盤が低く水路が入り組んだ土地に、主に長屋建てによってスプロール的に市街化した密集市街地の典型地区である。地域の大部分が、第2次世界大戦での戦災を免れており、現在に至るまで面的な基盤整備はなされていない。地域の総面積は約60haであり、平成17年国勢調査によると、夜間人口は5,957人、世帯数は2,553世帯である。
- (2) 「大阪市まちづくり活動支援制度」（1998年12月～2003年9月）により派遣された(株)PPI計画・設計研究所の支援を受け、住民の意識調査、各種ワークショップの実施、「野田地区環境マップ」の作成等を行い、「まちづくり憲章」や「まちづくり構想」をハンドブックに取りまとめている。その後「平成16年度全国都市再生モデル調査」（国土交通省）の対象地区に認定され、建物などの歴史的資源を活かし、災害に対し安心して暮らせるまちづくりを進めるシステムの検討が行われた。
- (3) 本研究では、住民および来訪者が「魅力的」と認識する可能性がある地域資源を「潜在的」とした。
- (4) 本研究では、住民および来訪者が「魅力的」と認識する地域資源を、別途「魅力資源」と総称する。
- (5) 外観目視調査は、夏季(2003年8月25日～9月10日)と冬季(2003年12月1日～12月10日)の2回に分けて実施した。
- (6) 「樹木・花系」は、景観形成の観点(アイストップ、シンボリック)と種類・形状の観点(桜・野田藤等の花樹、落葉樹など)で把握した。
- (7) 住民を対象としたWSは、1回目を2004年3月30日(火)に、2回目を2005年1月25日(火)に、地区内のコミュニティセンターで実施した(いずれも19:00-21:00)。WSの案内は、いずれも町会の回覧板によって全世帯に告知し、町会の掲示板のポスターでも行った。参加人数は1回目14人、2回目40人であった。内容は、野田地区の潜在的な魅力資源256件の写真カードを用意し、参加者を町会単位に3班に分けて「魅力的」と思うカードを複数選定してもらった。最後に班ごとに会場発表を行い「住民にとっての魅力資源」を共有した。2回目のWSは、1回目のWSの参加者が少数であった為に再度同じ内容で実施したものであり、1回目の結果確認と新たに魅力資源の把握を行った。
- (8) 来訪者を対象としたWSは、2005年12月4日(日)14:00-17:00に、野田地区にある長屋を改装したイベントスペース(D.B.F.)で実施した。WSの案内は、会場にチラシを設置し、インターネットでも告知した。参加人数は25人であり、考える会2人をオブザーバーとした。内容は、参加者を無作為に3班に分けて補注(7)と同様に進めた。写真カードの選択の際は、選択した理由や資源の活用アイデアについて来訪者自身の自由記述により記録した。参加者の居住地は、大阪市内(福島区を含む)が56%と最も多く、うち福島区の住民は12%であり、野田地区からの参加はなかった。また参加者の勤務地(通学先)は、大阪市内(28%)と大阪府内(24%)で半数以上を占め、福島区(野田地区を含む)の比率は16%であった。野田地区を知っていた参加者は76%と高く、うち過去に地区内に来訪したことがある参加者は48%であった。
- (9) 住民・来訪者双方を対象としたWSは、2006年1月29日(日)14:30-16:30に地区内のコミュニティセンターで実施した。WSの案内は住民に対しては補注(7)と同様、来訪者に対しては補注(8)と同様であり、参加人数は、住民8人、来訪者17人であった。
- (10) 組織名称は「野田まち物語 -noda na noda-」である。来訪者側のメンバーは計10名であり、西江と(株)PPI計画・設計研究所の近藤秀樹氏(いずれも私的に参画)の他、地元リフォーム会社、建築関係者、学生、福島区民、此花区民から構成される。具体的活動の一例として、福島区地域福祉アクションプラン推進委員会と連携した「いこいのステーション物語」があり、地域の福祉・交流・活性化の観点から、まちの魅力づくりや情報の発信を目指している(2007年6月現在)。

-参考文献-

- (1) 西江幸久、小島和佳子、中村仁、赤崎弘平(2004)「密集市街地における地区レベルでの潜在的な魅力資源の把握—大阪市福島区野田地区を事例として—」、日本建築学会大会学術講演梗概集F-1, pp.415-416
- (2) 中村仁(2006)「密集市街地におけるストック活用型環境改善アプローチの可能性と課題—長屋の耐震改修を手がかりとしたまちづくりの実践的研究—」、日本建築学会第1回住宅系研究論文報告会研究論文, pp.309-316

謝辞

本研究の実施に際しては、野田のまちづくりを考える会、(株)PPI計画・設計研究所、大阪市立大学工学部都市計画研究室、D.B.F.の関係各位と、WSに参加された住民・来訪者ほか、研究過程で私的にお世話になった多くの方々との協力を得た。ここに記して心より謝意を表したい。